翻訳

ニューグレンジを訪ねて

エイリッシュ・ニ・グウィヴナ
香山はるの（訳）

エリックにムティ（ドイツ語でママの意）から手紙が来た。五月にこちらに来たいという。エリックがバート・シュヴァルツシュタットで最後に休暇を過ごしてから二年になり、息子に会いたくなったのだ。それにムティはアイルランドには行ってみたいと思っていた。村の旅行代理店のポスターでコネマラの風景を見た。湖に丘にロバ。丘は本当に鮮やかな緑色で、ムティは登ってみたくてたまらなくなった。空は本当に真っ青。その上、ロバも本当に人懐こそう。これまでずっと心の中に抱いていたアイルランドのイメージ通りだった。十四日、午後一時二十三分に、E四三二七便の飛行機で到着する予定だ。エリックには数時間勉強の時間を割いて、迎えに来てもらえないだろうか。もちろんとても忙しいのはわかっているから、無理だったら構わない。ファーティ[1]が亡くなってから（もう十五年になる）一人で旅するのには慣れている。確かに六十八歳だし、股関節炎もある。でも一人だって何の問題もない。少なくとも英語は結構できる。手前味噌になってしまうがそうなのだ。冬中バート・シュヴァルツシュタット社会人教育センターで勉強してきたのだから。もちろん、英語圏の国には行ったことがない。少なくとも戦前に行ったきりだ。その時は、デヴォンの家庭でホームステイをして英語の力をつけた。ムティの父親は医者だった。一九四四年の六月六日、いわゆるディー・デー[2]に、フランスの海岸で負傷者を看（み）ている時に亡くなったのだ。

明らかにムティは長い手紙を書いてきた。私は直接読んでいないけれど。エリックが人を笑わせるときに時折使う軽い皮肉な口調で、私に内容を伝えてくれたのだ。おそらく話している途中で、こまごまとあれこれ尾ひれをつけたのだろう。あの人は想像力が豊かだから。

けれども、エリックの穏やかな含み笑いの下にはヒステリックな本心が明らかに見えたので、私は無視するわけにいかなかった。そ

れは恐れに違いないと私は思った。ムティを怖がっているのだ。僕、ムティには少し横柄なところがあるって一度か二度君に言わなかったっけ？ そう、確かに言ったよ。「輪をかけて」横柄だってね。（エリックは、英語が母国語でない多くの外国人の例に漏れず、口語表現を豊富に覚えていてやたらとそれを使いたがる）ムティは正真正銘のガミガミ婆さん。とにかくタフだよ。二歳のアヤトラより我が強くて、マギー・サッチャーより保守的で、その上コチコチのルター派信者ときてる。ジョン・ノックス[3]よりも厳格なんだ。

エリックは私にムティの滞在中はアパートから出てくれと言う。ほんの一時的なことだからと。

ムティは僕が君と暮らしているって知らないんだし、わかったらショックが大きすぎるよ。僕は一人息子だからね。ほんの二週間じゃないか。なんでこんな些細なことで騒ぎ立てるのさ？ たった二週間だよ。

じゃあ、私の母はどうなの？ 私はエリックに丁重に聞いてやった。私の母はそれこそコチコチのカトリック。ヨハネ・パウロ二世より保守的で、マクナマラ大司教よりも厳格なんだから。自分の娘―お気に入りの五番目の娘―が、結婚しないで男と暮らすなんて大罪を犯すのを、これまで仕方なく見て見ぬ振りしてきたの。ドイツやラネラでは生活が違うんだ、ゴールウェイのチュアムだってじきにそうなるだろうって自分に言い聞かせてね。それから私のことは？ わかっているでしょう、私だってコチコチのカトリック、いえ、それだけじゃないわ、青よ。マリア様が着ていらっしゃる繊細で透き通ったマントの色。青白い、美しい襞のある純潔の象徴よ。だって、私、娘盛りの十五の時だけれど、「聖母マリアの子供」としてロレート・オン・ザ・グリーン校のチャペルでマリア様に一生を捧げると誓ったんですからね。どう？ それから、あなたが何よりも重んじている誠実、勇気、正直とやらはどうなの？

ムティは六十八なんだ。股関節炎もひどいし。たった二週間じゃないか。頼むからさ。

こうして、五月十三日に私はすぐ近くに住むジャシンタの家に移った。十五日にエリックは私をお茶に招いて、ムティに紹介した。股関節炎のせいで少しよろよろしたけれど、ムティはすぐに近づいてきて私を温かく抱きしめた。普段私は誰かのお母さんを抱擁するとか、体に触れるといったことはできる限り避けているのだけれど、この時は油断していて不意を突かれた。一方、ムティの方は私の混乱した様子など気にも留めずに、輝くばかりの微笑みを振りまいて言った。

「お会いできてとっても嬉しいわ！ エリックが今朝あなたのことを全部話してくれたの。素敵な驚きね！ エリックにガールフレンドがいるなんて知らなかったわ。アイルランドで、ねえ！」

私は優しく彼女の手を握った。やせて骨がごつごつした、熱い手だった。薬指には岩のように出っ張ったところが二カ所あって、私の手のひらに食い込んだ。手を握りながらすかさずムティのことをチェックした。身長は五フィート位で華奢な体つき。灰色の豊かな巻き毛に、大きなリンドウ色の目。加えて、白く輝く歯がたくさん。

過ぎし日の美人という感じ。もっとも「過ぎし日の」というのは私の考えで、当人はおそらくそうは思ってはいないでしょうね。この手の自信家タイプに関する私の経験に誤りがなければ。

「それじゃあ、お茶にしましょう！」

ムティはこう言って私にソファーの方へ来るよう、身ぶりで合図した。昨年の冬、私がキルケニー・デザイン・センターで購入した美しいツイードのソファーだ。ムティと私は腰を下ろし、エリックがやかんをかけた。紅茶を一杯ね。夕食は町で食べて来たんだよ、とエリックが説明した。そうね、そう、素晴らしいお食事だったわ、とムティはしぶしぶ言った。私の方は、町で夕食なんて食べていない。昼食の後は何も食べていないし、その昼食だってライ麦のビスケット二枚とチーズを一切れかじっただけ。

私はムティの背中越しにエリックを睨みつけてやったが、彼は歌でも歌うみたいに「サンドイッチはどう？　お腹空いてる？」なんて言ってきた。「いえ、全然空いていないわ。どうぞお気遣いなく」よそよそしく答えたのだけれど、彼には全く効果なし。あの人はどんな天候にも耐えられる感受性を持っていて、内側のチャックをぐいっと閉めたら大気の状況がどんなに変化しても影響を受けずにいられる。（これは私を魅了する彼の才能の一つだ）エリックは楽しそうに、薄くて味のない紅茶をいれたマグカップを三つ、コーヒーテーブルの上に置いた。三人でゆっくりお茶をすると、エリックと私はソファーに並んで座り、ムティと向かい合った。ムティはまず自分をフレデリカと呼ぶように私に要請して（そんな風に呼ぶくらいなら、死んだ方がマシよ）、「口頭英語（オーラルイングリッシュ）」の軍事演習を開始した。そして、ドイツからここに来るまでの旅やその日参加した観光ツアーについて、詳しい報告をした。その後は、肝心な尋問の時間。「アイリーンさんのご両親はご健在？」、「お父様は何をなさっているの？」、「アイリーンさんのお仕事は？」、「職場ではどんなお立場なの？」、「お給料は？」迅速だが、手際よく質問は進んでいく。尋問が終わると、ムティの司令に従って皆でテレビを見ることになった。テレビはムティが英語と格闘するのに役立つからだ。帰る頃には、次の日の朝私がムティとエリックを迎えに来て、車でニューグレンジ[4]へ連れて行くことに決まっていた。エリックに言わせると、ニューグレンジはまっとうなアイルランドのツアーには欠かせないものなのだ。

「おお、そうね。すごく素敵！　ニューグレンジね。ミュラーさんも確かニューグレンジのこと書いていたわ。スピッダルの近くでしょう？[5]」

ここに来る一か月前、ムティはバート・シュヴァルツシュタットの公共図書館からガイドブックを一冊借りた。ハインリヒ・ミュラーとかいう人が書いた本で、タイトルは『アイルランドのミニ・ガイドブック』だ。ムティはひたすら熱心に本を読んで、ついに内容を暗記してしまった。実際それはこの休暇中必携のガイドブックになった。ムティにとって観光の主な判断基準は、ミュラー氏がその場所に言及しているか否かということなのだ。

こういうわけで、ムティは楽しそうに、そしてミュラー氏に感謝

しながらオコンネル・ストリートのごみの中を足をひきずっていったが（「おお！　これがアイルランド中で一番荒れた通りね！」）、パワーズコート・ショッピングセンターは全くお気に召さなかった。ケルズの書には賞賛を惜しまなかったが、「アイルランドの宝（トレジャー）」の展示には冷ややかな失望を示した。「教えてちょうだい。宝（トレジャー）ってどういう意味なの？」国立博物館を出てキルデア・ストリートを歩きながらムティはエリックに聞いた。「授業でその言葉は習わなかったと思うわ」

ハインリヒ・ミュラー氏は旅の大半をスピッダルで過ごしており、実際ガイドブックの半分以上、丸々十ページをスピッダルと周辺地域の詳細な説明に充てていた。おかげで、その西部の村でムティの知らない所など殆どないくらいだった。ムティは、自分がスピッダルに行くときのことをあれこれ考えては声高に、至極楽しそうによく喋った。残念ながら、ダブリンの滞在後に行くので、そちらには二日間しかいられないのだけれど。

翌朝私は財務部の仕事を一日休んで、アパートに二人を迎えに行った。

「フィーニックスパークを通って行きませんか」せっかくだから時間を有益に使おうと思い、愛想よく誘ってみた。「その方がずっと面白いし、ほんの少し遠回りするだけです。大統領官邸もあるし、ヨーロッパで一番大きい公園なんですよ」

「そうね」助手席に乗りこんで地図を広げながら、ムティは気がなさそうに答えた。「その公園ってどこなのかしら」

私はブレーキ越しに身を乗り出して、場所を教えてあげようとした。けれど、エリックの方が一瞬早く、後部座席から地図の緑色に塗られた一画を指さした。ムティはハンドバッグから鉛筆を取り出し、宙にかざしてにこっと笑った。「じゃあ、出発としましょうか？」わかったわ。「さあ、車を出してちょうだい」ってことね。

チャールモント橋まで来た。

「運河ですよ」ラネラ通りに入る時、手でさっとそちらを指して私は誇らしげに叫んだ。

「運河？」

「そうだよ、ムティ。運河。川じゃないよ。人工なんだ。運河（アイン・カナール）のことだよ」エリックは恐々（こわごわ）とドイツ語の説明を入れた。英語の学習の妨げになるから私の前ではドイツ語は使わないでと、ムティから言い渡されていたのだ。

「グランド運河です」私は物知り顔で続けた。「ダブリンには運河が二つあります。ロイヤル運河とグランド運河と。こちらはグランド運河。なかなか有名なんです。色々な詩にも歌われています。いい詩です。割と知られているんですよ」

しかし、ああ、悲しや。目の前にあるのは、カヴァナー[6]の詩にある「愛の葉が茂れる岸べ」ではなく、落書きがいっぱいのグロテスクな運河。ムティはカビの生えた剝げかかった壁やころがっている犬や猫の死骸に目を見張り、戸惑っていた。もっとも、そこが絵のように美しい場所だったとしても、高尚な文学との関係なんてム

ティには何の意味もなかっただろう。カヴァナーはハインリヒ・ミュラーの後の世代なのだから。

キルメイナム刑務所の方に向かって走っている間、皆黙っていた。刑務所がぼうっと見えて来たとき、私は情熱で胸があふれんばかりだった。「自由のための戦い」はミュラー氏のお気に入りのテーマだったし、ムティもまた、本人の言葉から察する限り、アイルランドの血なまぐさい歴史に対するロマンチックなノスタルジアに浸っているようだった。

「あれです！」私は大声で言った。「キルメイ……」

ところが、ムティの方は付近にある男子校の正門に目をやっていた。確かに印象的な門ではある。でも、所詮はにせ物だ。

「まあ、エリック！　なんて素敵なんでしょう！　中世のものよね？」

「そう、そうだね、そう思うよ、ムティ」エリックはえらく知ったかぶった声で答えた。ダブリンのこと、建築のこと、中世のこと、何一つ知らないくせに。

「ドイツの城にもああいうのがあるわね」

「見て下さい」と、私も負けずに言った。「あれがキルメイナム刑務所です。一九一六年の復活祭蜂起の首謀者たちはあそこに投獄されました」信号が緑に変わった。「そして、銃殺されたんです」これで関心を持ってくれるだろうと思って、つけ加えた。

「アイリーンさん、バート・シュヴァルツシュタットではね、十三世紀に建てられたお城が二つあるのよ。マリエン城とカールス城。とても素晴らしいわ。世界中から人が見に来るの」

「本当ですか？　私もぜひいつか見たいものです！」

ドイツにいらっしゃいよ、と言ってくれないかなと期待したけれど、ムティは乗らなかった。アイランドブリッジゲートから公園に入った。

「これがフィーニックス公園です」私のガイドツアーは続く。

「まあ！　公園。車で入れるの。結構ね」実際ムティの口調は非難がましくて、「結構」とはとても言い難かった。「ドイツではね、車が入れないところが多いの。ご存知かしら、グリーン・ゾーンというのだけれど。たまには車なしもいいものでしょう。特に健康には、ね」

その時、一台のフォルクスワーゲンが、公園の素敵な裏道によくある意地悪なカーブを回って突っ込んできた。不意を突かれて、私はハンドルを切って避けるしかなかった。ほんの少しハンドルを切っただけ。悪いのはワーゲン、ドイツ車なのだ。

「あー、あー、あー、あー！」ムティは、パッと両手で顔を覆い、金切り声を上げた。なんと、骨ばった指の間から、あのリンドウ色の目が私を恨めしそうに見ている。私は歯ぎしりをして五十数えた。それから「口は災いの元」と五十回繰り返すことにした。二、三週間前に『コノクト・リーダー』に出ていた諺だ。一方、ムティの方は「教皇の十字架」や活気に満ちた林、跳ね回るシカの群れ、アメリカ大使公邸、車のボンネットにぶつかるジプシーのポニー、ポロ競技場やアイルランド大統領官邸など、見所といわれるものにはま

るで関心を示さなかった。
「次に行くのは何ていう町？」
「カスルノックです」次の「口は災いのもと」に移る前に私は答えた。
シュッ、シュッとムティが地図にペンを走らせた。ブランチャーズタウン、マルハタード、ダンシャウリンにトリムと順々にシュッ、シュッと線が引かれていく。その間、車は美しい生垣やキンポウゲ、サンザシできらめく田舎道を進んでいった。至る所で玉虫色に輝く木の葉がざわざわと揺れている。中世のアイルランドでは多くの修道士がこうした風景と出会い、歓喜に心を奪われて詩作に励んだ。一年のこの時期になると私は、友人たちにそう教えてあげたくなった。自分は没個性的な公務員をやっているけれども、若い時分には最高の、そして最もケルト的な詩人の洗礼を受けた（古アイルランド語の学位を修得した）のだと彼らに思い出してほしくて。今でもオランダガラシやハシバミの香りがするようだ。あの時だって、カセットにクロウタドリの鳴き声を録音しておけただろう。でも、私は目の前の真にアイルランド的な風景についてムティに熱く語ったりはせず、ご自分の研究に引き続き専念させておいた。スッ、シュッとペンの音が続いた。
ミーズ州に入り、車を降りてランチをとることにした。「あら」と、ムティは「昔風」と銘打ったホテルの外で、これはいいわというように息を呑んだ。「素敵じゃない！」ムティは、こうした趣のあるレストランは料理の質も高いだろうと思ったのだ。しかし、ああ、残念。期待できそうな入り口を入っていくと、「ランチはバーでお出します」と書いてあるではないか。その上、油とアルコールのウッとくるような臭いが鼻を突いた。ムティの高尚なルター派の考えでは、お酒はこの上なく「非上流階級的」なものらしい。あの完璧な鼻に嫌悪のシワが寄った。
「ムティ、何か飲み物はどう？」いそいそとハープを二パイント頼みながらエリックが聞いた。
「ハープ？　それ何なの？　レモネード？　ジュース？」
「ええと、違うよ。ライト・ビールなんだ」
「ジュースにしてちょうだい。ハープ・ジュースをお願い。のどがカラカラなの」
黄色く輝く、グラスの淵まで泡立った飲み物が三つ来た時、ムティは最初口をきゅっと結んでいたが、それから勢いよくすすり始めた。食事が出てくるのは遅く、ムティはいらいらして足でカーペットをトントンと踏み鳴らした。
「お腹が空いてないのが幸いね。このお店じゃ豚でもしめているのかしら」
二十分してようやくウェイトレスがやって来た。ムティに大きなお皿を持ってきて、豚肉と付け合わせのニンジン、カリフラワー、キャベツやジャガイモを盛りつけ、肉汁もかけてくれた。ムティは何でもたっぷりよそってもらった……「お腹は減ってないけど、お金を払うのだから」……そして、よそってもらったものは殆ど食べ

ずに、残った料理をコートのポケットから魔法のごとく現れたビニール袋にするりと入れた。「だって、お金払うんですものね」自分の声が大きいかなんて全然気にかけない。「これは明日のお昼ごはんにするわ。年を取ったら、肉は少しでいいの。食欲もそんなにないし」

エリックと私は急いでサラダを食べ終え、三人でまたニューグレンジへ向かった。

ニューグレンジは期待を裏切ることはない。少なくとも私に関しては。知人の中にはニューグレンジを嫌いな人も多い。ナウスやダウス—或いはガース(7)—の方がいいと言う。ニューグレンジなんてくたびれて虫が食った骨董品みたいだと。でも、私はあの優しく輝く上品な不滅の前壁が気に入っている。ニューグレンジはいわば尊大な水晶宮。肥沃な放牧地や蛇行するボイン川の漁礁に君臨して、壮麗な太陽の光を反射しているのだ。

エリックはニューグレンジの考古学的意義に口先だけは感心していたけれど、「先史時代」を強調する宣伝には反対の立場だった。どこかうさん臭いものを感じていたのだ。だからムティが同じような考えだったとしても、私は驚きはしなかっただろう。ところが—

「素晴らしいわね」古墳を目指して三人で丘を登っているとき、ムティは息を切らしながらエリックに言った。

「きっとムティの気に入るだろうと思っていたんだ」馬鹿みたいにニタニタしていたけれど、エリックの目はそこにいるツアーガイドに釘づけだった。てかてかした黄色のパンツと白いTシャツの上から釉薬でもきれいにかけたような、すらりとした挑発的なタイプの女性だった。彼女は塚の外の立石に寄りかかってポーズを取りながら、簡潔に遺跡の大まかな歴史を説明し、それから狭い通路を抜けて墓室へと観光客をゆっくり先導した。ムティは外から見る墳墓も気に入っていたけれど、中に入ったらまさに恍惚の境地。丘の真ん中にある氷のように冷たい墓室に魅了されて、「おお」だの「ああ」だの歓声を上げ、実に感激した様子だった。このため、あのレモン色パンツのガイドは、特にムティに向って説明した。ムティの大きな目を捉え、その他どうでもいい人たちのことは構わない様子だ。やがてガイドが営業用トークを終え、「ご質問はありませんか」と皆に言うと、ただ一人、ムティだけがそれに応えて聞いた。

「ルーン文字が書かれている石はあるんでしょうか?」なんて間抜けなこと言っているんだろうと私は思った。ところが、間違っているのはなんとこちらのようだ。丸天井の脇の石にはルーン文字が刻まれているかもしれないというのだ。あのガイドはムティの機嫌をとるためにこんな面白い話をでっち上げたのかしら? まさか。あばずれ風ではあるが、嘘はつかない顔だ。

ツアー終了後もムティと私は墓室に残っていた。他の見学者が徐々に帰り始めたけれど、ムティが残りたそうだったので、私もつきあわなければと感じたのだ。股関節炎がある人を放ってはおけないではないか。でも、そのひんやりした灰色の場所はなかなか居心地がいいと私自身だんだん感じてきた。初めて気づいたのだが、そ

ここには不思議な親密さというか、人々が食事をとるために—生きていくために—集う家庭の中心、つまり台所に似た性質がある。それに、お墓のように冷え冷えとしてはいるけれど（実際お墓だ）、この部屋には炉床もある。ここはガイドの説明の目玉であるが、一年に一度太陽が外壁の開口部から射し込んで羨道へまっすぐ伸びていき、墓室を溢れんばかりの光で満たす。死者の不滅の魂を照らし出すのだ。

ムティは細い指先で墓石の渦巻き模様をなぞりながら、私の方を向いた。

「十二月二十一日にはどんなに素敵でしょうね。実に素晴らしいわ！」

ムティの目はこれまで見られなかった率直さで輝いていた。そして知り合ってから初めて私たちはじっと互いの顔を見つめ合った。二人とも笑ってしまった。ムティは腰をかばってゆっくりと私の方に歩いてきた。私も走って行ってムティを抱きしめて、キスしたいという衝動を覚えた。ムティは感情表現が豊かだから、私がそうしたところでまごつきはしなかっただろう。でも私は普段誰かのお母さんにキスするとか、他人の体に触れるといったことはできるだけ避けるタイプなので、結局躊躇してしまった。

エリックがそっと墓室に入って来た。ムティはよろよろとそちらへ行き、息子の手をしっかりと握った。

「もう行こうよ。この気味の悪い昔の墓にまだいたいの？」

救いの時機はあまりに短い。それはあまりにも突然やって来るから、あっけなく逃してしまう。

訳注

（1）ドイツ語でパパのこと。
（2）第二次世界大戦で、英米連合軍によるノルマンディー進攻作戦開始の日。
（3）十六世紀のスコットランドの宗教改革者。長老派教会を創立。
（4）ミーズ州ボイン川沿岸にある新石器時代の有名な巨大古墳。一年で最も日が短い冬至の日に、入り口の上のルーフボックスから墓室まで日が差し込むように設計されている。
（5）スピッダルは西海岸のゴールウェイ州にある村。ニューグレンジがスピッダルに近いというのはムティの勘違いである。
（6）アイルランドの詩人、小説家のジョン・パトリック・カヴァナー（一九〇四—一九六七）のこと。「運河の岸辺を歩く」という詩のほか、「大飢餓」の詩や『タリー・フリン』という小説等で知られる。グランド運河沿いのウィルトン・テラスにはベンチにすわったカヴァナーの像がある。
（7）ナウスとダウスはそれぞれニューグレンジの付近にある古墳。ガースは『若きウェルテルの悩み』などの作品で知られるドイツの文人、ゲーテの英語読み。ここでは韻を踏んだ言葉遊びで入れられている。

テキスト

Eilís Ní Dhuibhne. “A Visit to Newgrange.” *An Anthology of Irish Comic Writing*. Ed. Ferdia Mac Anna. London: Michael Joseph, 1995. 246-255.